

夏の福袋 '14

じぶんの いっしょ展

ココから

2014年7月20日 [日曜日] » 8月31日 [日曜日]

茅ヶ崎市美術館

CHIGASAKI CITY MUSEUM OF ART

主催:公益財団法人 茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団

協力:茅ヶ崎市立緑が浜小学校、茅ヶ崎市立第一中学校、茅ヶ崎養護学校、

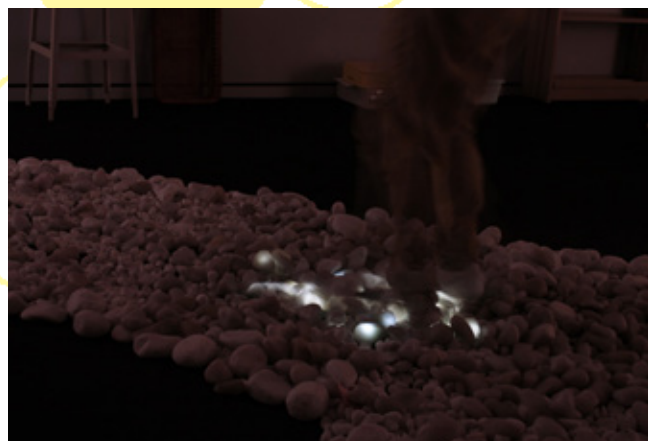
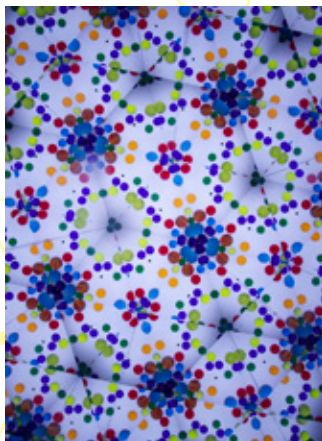
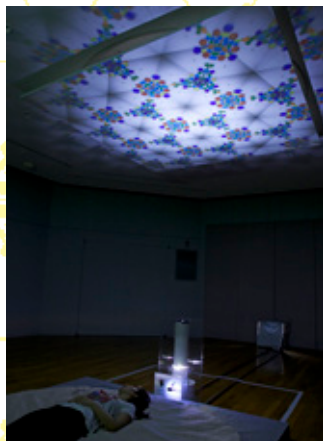
文教大学国際学部井上ゼミナール、大村紙業株式会社、

株式会社石川造園土木

展覧会ドキュメント | Exhibition Documentation

MY ONE STEP
— FROM HERE





24億分の1

one/2400000000

金箱淳一 (2010)

普段無意識に行いながらも、人間にとってかけがえない心拍を捉え直す装置であるこの作品。タイトルにある24億という数は、人が一生の間に打つといわれている鼓動の数を示しています。体験者は、天井に映る自分の心拍に連動して変化する万華鏡の映像を見て、心拍のテンポに応じて作り出される音楽を聴き、寝転んだ床の振動を背中であらえ、自分がいま現在生きている証を全身で体感しました。

体験者の声

娘と一緒に寝転んで体験して、娘がお腹の中にいる時のことを思い出し、思わず胸が熱くなりました。

(40代・女性)

僕の心臓は昔から医者にかかっていて弱いんだけど、こんなきれいな映像を出せるもんだなあ…。来て良かった。

(60代・男性)

1回1回の鼓動が無限ではなく限られているものだと思うと、一瞬一瞬を大切に生きたいと思った。

(10代・女の子)

自分マッピング

My map

首藤圭介/金箱淳一×茅ヶ崎市立緑が浜小学校、茅ヶ崎市立第一中学校、茅ヶ崎養護学校、文教大学国際学部井上ゼミナール (2014)

正確な地図は見ないで、自分が想像する距離と建物の大きさで地図を作ったこのプロジェクト。1人の人間がとことこ道を歩く姿。バスに揺られ、時には居眠りをしながらも、いくつかの風景を認識している様子。友だちの家へ向かう道、サーフィンのため海へ向かう日々など。普通の地図では決して現われてくることがない、人が生きていることを感じられる地図が、茅ヶ崎市内の教育機関との連携ワークショップにより出来上がりました。

色々な年代のマッピングが見られて面白かったです。人間は年とともにアウトプットが変わってくるのですね。

(40代・女性)

鑑賞者の声

自分たちの知っている茅ヶ崎が、他人から見るとこういう風に見えるのかと、新しい視点から見られたところが面白かった。

(20代・女性)

自分でも作ってみたいのでルールをメモしました。

(60代・女性)

The Blink Stone

the blink stone

首藤圭介/金箱淳一 (2013)

私たちの踏みしめる一歩によって瞬間的に光る石のようなこの作品。作られた背景には、2011年に日本を揺るがせた東日本大震災と、続いておこった福島原発事故が関係しています。この作品は、太陽光エネルギーで発電・充電をおこなう機能と、振動によってLEDを発光させる機能をもった基盤を、樹脂製の「石」それぞれに内蔵したことで、電気などのライフラインに依存せず、風や水のある場所など、従来であれば展示が難しい野外においても成立するメディアアートの新たな可能性を提示しました。

体験者の声

家の庭にあったら楽しそうだな。

(10代・男の子)

なんでひかるのかな？くらいいやじゃないとみえないのかな？いろんなことをかんがえました。

(7才・女の子)

普段、自分の鼓動や一歩一歩を気にすることはありませんが、改めて体験を通して、生きていると実感しました。石を踏んで歩く道は、自分と向き合ういい機会となった。

(20代・女性)



『おやゆび型どりワークショップ』

講師：首藤圭介（アーティスト）
 金箱淳一（メディアアーティスト）
 日時：2014年8月10日（日）
 ①11:00～12:00 ②14:00～15:00
 場所：茅ヶ崎市美術館アトリエ
 対象：小学4年生以上 参加者：①8名 ②3名

台風接近により天気が二転三転する中、足の親指を石膏で型どるワークショップを実施しました。型を固めるために5分間じっと姿勢を保つ方法を皆で模索したり、事前に足がつかないようにストレッチをしたりして型どりに挑戦しました。姿勢を保つのに苦戦しつつ作った型に石膏を流し込み、待つこと約15分。型から石膏を取り出す瞬間には「うわ〜」「きもちわるい」「すごい」と様々な歓声があがりました。思っていた以上に大きくて、指紋までくっきりと現れている石膏に、参加者は驚いた様子でした。石膏でできた足の親指を手の平に置いて暫く色々な角度から眺める人が多く、大切な一歩を踏み出してくれる足の親指を、改めてじっくりと見る貴重な機会となりました。



『茅ヶ崎キック・ザ・ストーンカップ2014』

講師：首藤圭介（アーティスト）
 金箱淳一（メディアアーティスト）
 日時：2014年8月31日（日）18:30～20:30
 場所：茅ヶ崎漁港海岸公園
 対象：小学生以下
 参加者：30名

8月の最終日、夏の最後を彩るイベントとして、展覧会で展示した作品である「The Blink Stone」(光る石)を使って夜の石蹴り大会を茅ヶ崎漁港海岸公園で実施しました。講師より競技の説明があった後は、自分に合った石選び。ひとつずつ形が違うため、参加者は蹴り心地や光り具合を確かめながら選びました。競技は、どれだけ遠くに飛ばすことが出来るかを競う「遠蹴り」と地面に設置した的にいくつ入れられるかを競う「的当て」。子どもから大人まで総勢30名の参加者が蹴った石は、砂浜でまるで流星のように瞬きました!最後には、優勝者へ作家が制作した茅ヶ崎のシンボルである「えほし岩」を型どったトロフィーの贈呈があり、2014年夏の夜、波の音を聴きながらの茅ヶ崎らしい素敵なイベントとなりました。



出品作家・講師プロフィール

首藤圭介 SHUTO Keisuke

1978年大分県生まれ。日常に目を凝らし、何気なく存在する微細な事象を拾い上げ、ほんの少し手を加え、磨き上げ、制作を行っている。名古屋造形大学美術学科 | 彫刻科卒業。同大学彫刻科助手、インテリアや店舗デザインなどの企画デザイン、女子美術大学助手を経て現在、女子美術大学非常勤講師。

金箱淳一 KANEBAKO Junichi

1984年長野県生まれ。岩手県立大学を卒業後、情報科学芸術大学院大学でギター玩具「Mountain Guitar」や振動を伝えるドラム「Vibracion Cajon」などの楽器とインタフェースに関する研究を行う。卒業後、玩具の企画開発会社を経て現在、女子美術大学アート・デザイン表現学科メディア表現領域助手。2013 Asia Digital Art Award エンターテインメント部門大賞をはじめ、受賞多数。



『おもちゃで作るじぶんのモバイル』

講師：張 雅美（アーティスト）

日時：2014年①7月25日（金）13:00～15:00

②7月30日（水）13:00～15:00

場所：茅ヶ崎市美術館アトリエ

対象：小学生以上

参加者：①15名 ②15名

講師と一緒に、身体を使った「モバイル体操」でバランス感覚を掴むところからスタートしたこのプログラム。参加者は持参したキラキラ光るビーズやアニメのキャラクターの人形、手描きの絵に小瓶やエアプランツなどの思い入れのあるものを材料にして、自分だけのモバイルを作りました。木に小さな穴をあけて紐を通したり、指を使ってバランスが取れるポイントを探したりと、真剣に取り組んでいました。期間中に職場体験に来ていた高校生たちも加わり、モバイル作りの助っ人として大活躍してくれました。完成したあとは、個性豊かな色とりどりのモバイルを美術館の裏庭に吊るして、夏の風に揺れる姿を楽しみました。

『はじめのいっぽ！美術館はっけん隊』

講師：藤田百合（女子美術大学非常勤講師）

阿部祐子（文化学園大学非常勤講師）

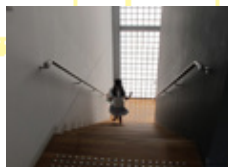
日時：2014年8月21日（木）13:00～15:00

場所：茅ヶ崎市美術館と前庭

対象：小学生

参加者：6名

暑い日差しの中、茅ヶ崎市美術館に初めて来る小学生を対象に、プログラムを実施しました。子ども達は、講師によるお手製のクイズが書かれたマップと双眼鏡などの探検グッズを持って、早速探検に出発！図書コーナーにあるものを探したり、展示室内の温湿度計を見つたり、庭にある昔の噴水跡をスケッチしたり、美術館の中から外まであちこち探検しました。戻ってきてからは、皆で答え合わせをしながら美術館について学び、迎えに来た保護者に詳しくなった美術館のヒミツを早速伝える子の姿が見られました。美術館に来るのが初めてという子ども達に、まずは美術館そのものを楽しんでもらおうというプログラム。この体験をきっかけにして、色々な美術館に遊びに行ってくれたらと期待を込めたものとなりました。



出品作家・講師プロフィール

張 雅美 CHOH Ami

1979年生まれ。美術館に勤務後、作家として本格的に活動をスタート。人工骨を使ったモバイルなど、物と持ち主の密接な関係を活かし、使い道のない物を生命力溢れる作品に蘇らせる制作を行う。

出品作家・講師プロフィール

藤田百合 FUJITA Yuri

女子美術大学非常勤講師。東京国立近代美術館・教育普及室での勤務を経て、現職。

阿部祐子 ABE Yuko

文化学園大学非常勤講師。国立西洋美術館・教育普及室での勤務を経て、現職。

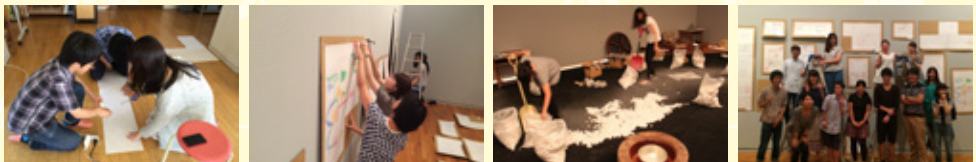
私たちは、何をもちて自分を自分と認識しているのだろうか？ そんな疑問が頭にふと浮かんだのは、産まれて間もない赤ちゃんが、自分の手足を不思議そうにじっと見つめたり、時には舐めたりして、自分を認識している様子からでした。誰もが産まれたばかりの頃には自分で自分を認識していたにも関わらず、日常では忘れがちになり、当然のように居ると思ってしまう自分に目を向けようと企画したのがこの展覧会です。自分の心拍を全身で捉えて生きていることを実感する作品、目をキラキラとさせながら散歩する日々を地図にした作品、暗がりの中で踏み出す一歩によって美しく光る作品。これらの作品を通して、現在生きている自分を感じ、時には振り返りつつも、様々なことが待ち受けているであろうこれからに向けて、新たな事にチャレンジする一歩が、瞬く光のように楽しめる一歩になればとの願いを込めて、

◎美術館という場の可能性について

会期中のアンケートには、嬉しい感想が寄せられ、何度も来たよ！と来る度に回数を記入して帰ってくれる子もいて、子

どもから大人まで多くの方が楽しんでくれた様子がとても伝わってきました。美術館が「楽しい場」として認識されたことは館の人間として大変嬉しくもありました。美術館が、人々からどのように認識され、どのような役割を持つことが出来ているのかという点に着目してみると、この展覧会においては、地元の教育機関との連携作業による展覧会作りであったことが特徴の1つとしてあげられます。文教大学の井上先生の協力のもと、博物館学の授業を受講している大学生たちを始め、隣の寒川高校から志願してくれた学生、職場体験で来ていた小学校の先生や高校生たちが、作家やスタッフと一緒にワークショップを中心に、展示の設営から撤収まで行いました。学校も年代も背景も異なる人々が隣り合い、会話をしながら作業を進める姿は、美術館という場が作品鑑賞のみならず、人と人が「出会う場」や「協働する場」としても機能することを、改めて実証してくれるものとなりました。

(茅ヶ崎市美術館学芸員)



『美術館へのいっぽ — 地域の美術館と大学との連携』

井上由佳

大学と地域の美術館が連携することは各地で試みられています。その理想的なあり方や姿というものはまだ確立されていません。学芸員もしくは大学教員といった「大人側」が満足して終わるだけの内容では、教育の一環でもある連携事業としては失格だと思います。美術館そして大学は「学生側」に何を体験させ、考えさせ、学んでもらいたいか。それらを念頭におきつつ、「大人側」の事情も鑑みながら、一定の理想的な連携の形となったのが、今回の茅ヶ崎市美術館における「じぶんのいっぽ」展と文教大学との試みです。学生たちはアーティストとのワークショップの中でマップを作成したり、他校でのワー

クショップのアシスタントを務めたり、展覧会の設営と撤収作業を体験させてもらいました。これらの体験を通して学生たちは「作品と自分の間の距離が縮まった」「美術館は楽しいところだと気付いた」「作業を通して、感動し達成感を感じた」とコメントしています。やはり机上の学びだけではわからない、現場でアーティストと作品と向き合いながら、身体を使った本当の意味での「体験」ができたからこそ、学生たちは美術館と自分との間に新しい糸をつむぐことができたのだと思います。今回の連携で、まさに美術館への「じぶんのいっぽ」が踏み出せたように思います。

(文教大学国際学部国際観光学科専任講師)